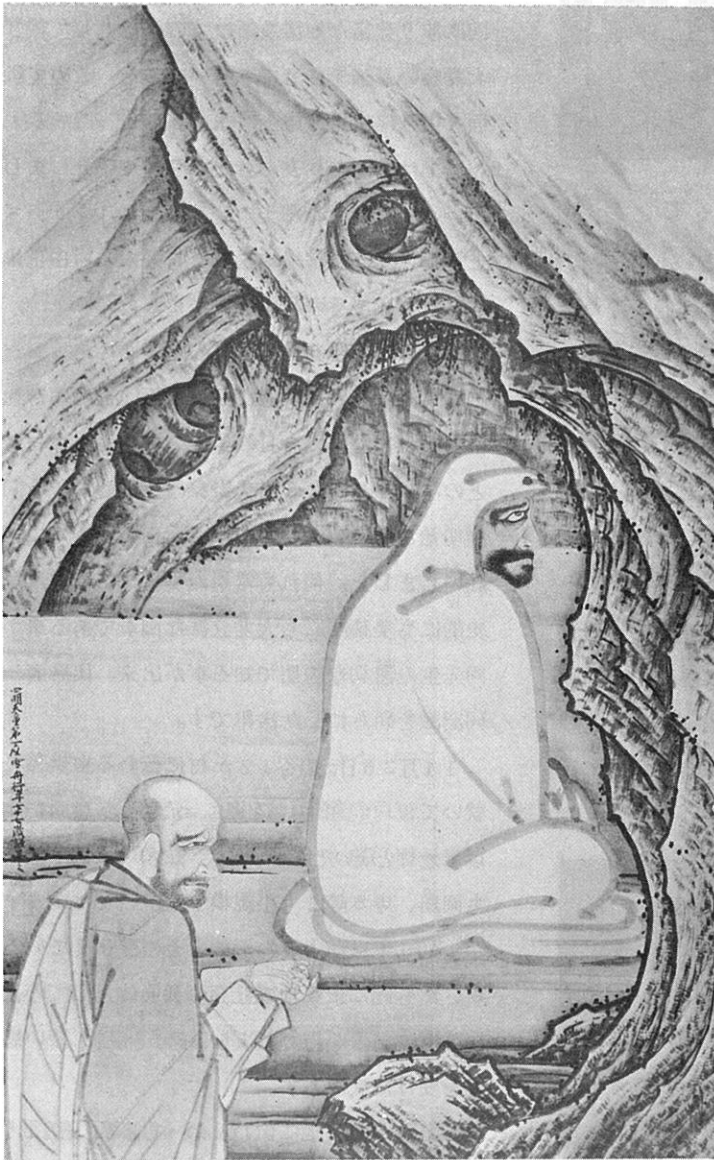


# 友の会だより

第2号

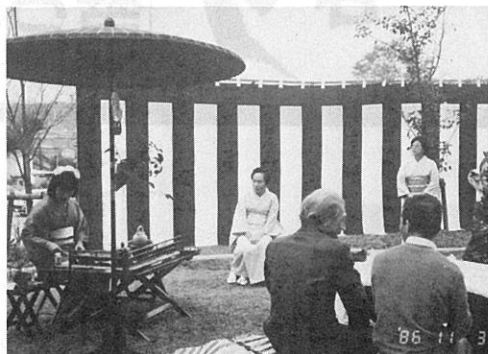


慧可断臂图 雪州筆 大野齐年寺蔵

昭和62年3月発行(1987)

## ◇部会報告◇

### 文化祭協賛 松風流山田宗女社中茶会



### この1年をふりかえって

友の会が誕生して以来、あっという間に、1カ年が過ぎ去らんとしています。

この1年間、各部会の講座のほか、他所への見学会の実施、資料館の金土恒展、かわや展等への協力、文化祭の記念行事として『趣味の交換会』を催し、現在は『わが家の歴史展』を開催中です。

又、現在拡張工事中の向山線の壁面に対する提言、焼物散歩道の見直しなど、検討しつつ、常滑の活性化に寄与するとともに、更に会員相互の親睦をはかり乍ら、楽しく郷土の文化遺産を守り、その歴史を探り、その知識を深めて行きたいと願っています。



### ◎郷土史部会

友の会が発足して1年を経過しました。

その間私の担当の郷土史部会は同好各位の御協力を頂きまして、市場町柴舟神社の御祭神の由来、次は東海市の吉川誠治さんに「酒造り歴史とあれこれ」を7月27日、8月24日の2回に渉り豊富な知識を傾けてのお話をして戴き大変良い勉強をさせていただきました。改めて紙面を借り厚く御礼申し上げます。

以上は前回の「友の会だより」で紹介しましたが、9月から「郷土の祭りと行事」シリーズとして、先づ旧常滑地区春祭を瀬木の村田正雄さんを迎えてその起源を伺いました。

即ち日露戦争の戦捷祝賀の行事がエスカレートして招魂祭の余興となり、常石、神明両神社の春祭と重なって今日の様なスタイルとなったとの事。10月26日大野祭の山車の解説を間瀬明治さんに、大谷の山車は沢田芳治さんに御願いしました。何れも常滑の文化財にされた歴史的にも美術的にも大変立派な山車である事が両先生の懇切な説明で知る事が出来、出席者一同認識を新たにしました次第です。

11月30日大野谷12カ村に伝わる虫供養に就いて榎戸の斎田直保を迎え、元和2年(1616)以来連綿と続いた信仰行事で、知多半島には他にも岡田、寺本等にも小規模乍ら続いてはいますが、350年以前よりの形態をその儘<sup>まま</sup>伝えている事、然も此に依り地域社会の共同体としての住民意識や結束が培われている様子を聴き、深い感銘を受けた次第です。

これからも各地に伝わる祭・行事等、適宜取り上げて行き度いと思っています。

12月には復習として徳川家康と常滑との関

係に就いて再び座談を持ちましたが、これは2月14日より催される「わが家の歴史展」の布石です。此の文が発表される頃には富松家の家宝及び古文書が展示されています。同時に展示された同家の家系に就いては聊かも私見を加える事なく御当主の書かれたものをその儘展示しました。御高覧の上いろいろ御教示なり御意見等賜りたいと願って報告とします。

(片山忠義)

## ◎陶芸美術部会

陶芸美術部会は縄文文化の話で足ぶみが続いています。担当の私が少しこだわり過ぎているので、あるいはご迷惑をお掛けしているかも知れません。しかし、いつまでに、何をどれだけと云った、学校の様なカリキュラムがあるわけではありませんので、今しばらくはこの調子で進めさせていただきたいと思います。何しろ一回2時間近く話すとなると、3週間位は夕食後マジメに勉強せざるを得ません。記憶力もそうとうあやしげになって来ていますし、疑問にぶつかれば調べ、興味がわいて来ればさらに先に進むといったぐあい、おかげで自分のいい勉強をさせていただいています。縄文はあと2回ほどで切り上げ、稲の来た道、照葉樹林文化といった、最近のフィールドワークの成果について話し、その後古代の焼きものに入って行く予定です。しかし、1月の様に時々話題を変えることもあるかも知れません。1月は「歴史とは何か」というテーマで、主として司馬遷を中心に、歴史がどう書かれ、私たちがどう学ぶか、と云った問題を私流にお話しました。

私もお話をする以上聞き手が多いほど張り切ってやるタイプですので、ぜひ参加して下さい。面白いですよ。(自画自賛をあえてしておきま

す。) また、僕はこういうテーマで勉強しているんで話してもいいよ、という方がお見えになったら、ぜひ名のり出てくださいたいし、あの人の話が聞きたい、と云うご希望があれば、いつでも時間をあけます。

とにかく一度来てみて下さい。多くの方の参加をお待ちしています。

(杉江重剛)

## ◎古文書部会

昭和59年1月「温故会」が発足して、古文書に親しみ、古文書の解読実習・郷土の歴史学習等をし、この「温故会」が発展して民俗資料館友の会となり、学習部会も

- 拓本部会      ○陶芸美術部会
- 古文書部会   ○郷土史部会

と多くなり、賛助会員等会員数も大変多くなって参りました。

古文書部会も新しい会員が多くなりましたので、研究部・入門部と二部会にわけて行うことになり、世話役をそれぞれ、研究部は間瀬、入門部は北川氏で、ということになりました。

皆さん多士済々で、男性あり・女性あり・若年あり・老年あり又、その学習も毎回発言が活発で、まことに和気藹々と楽しく勉強して来ました。老人のボケ対策には、なによりだと思えます。

我々の先輩・先人が、のこした古文書から昔の知識を学び、それを後人につたえて行くのは現在の人々のつとめだと思えます。又、学ぶ知識も有徳の知識・技術でなければならないと思えます。そして、良い習慣を身に付ける。この良い習慣を身に付けるという事が大切ですが、それには、たえず自分で努力し工夫することが必要です。

古文書が、それをよく教えてくれます。  
人間は、たえず刺戟をしないと、怠けて「ダメ」になってしまいます。  
「学而時習之、不亦説乎」（論語・学而）

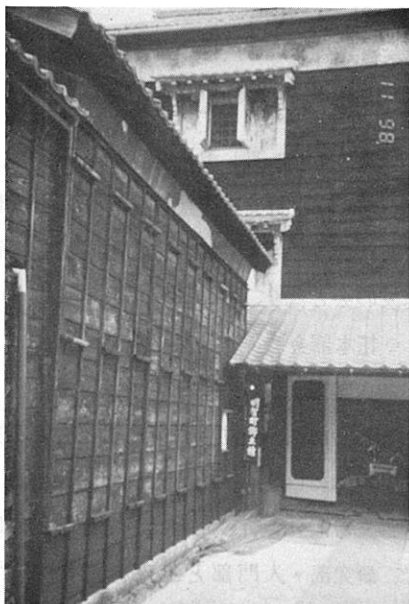
学んで時にこれを習う、亦た説（ヨロコ）ばかりならずや  
沢山の良いお友達と勉強する喜びが、これからもつづく事を祈ります。（間瀬明治）

## ◇見学会◇

大正村見学記

11月17日

参加58名



今、あちらこちらで村おこし町づくりが叫ばれている時、岐阜県恵那郡明智町の大正村を見学しました。

千疊敷公園から一望の眼下に開ける明智町を眺め熱っぽく説く、トレードマークのカンカン帽をかむった牛乳屋のおじさん、実は、町会議員で文化委員長さん。宮沢賢治をひそかに愛読し「雨ニモ負ケズ、風ニモ負ケズ」大正村へと通い「大正村の目標は世界平和の達成にあり」が口ぐせとか。

昭和61年12月13日、生まれたばかりの第三セクター明智鉄道の花電車「高峰号」に乗って、女優の高峰三枝子さんが明智町を訪れ大正村の村長さんに就任した事は皆さん方も記憶しておられる事と思います。

この明智町は、その昔遠山氏（北町奉行、遠

山の金さん）累代の領地で、明智氏（明智光秀）と姻戚関係にあるといひます。そこで少し大正村と合せて歴史の一端を史蹟の中からひろってみました。

### ●日本大正村（旧明智町役場）

明治22年4月、町村制公布施行と同時に明智町は町制を敷きました。明治39年、本格的洋風建築として建てられたのがこの役場です。瓦葺き寄せ棟造り二階建ての木造洋館で当時としては目を見はるほどモダンな建物でした。以来町を中心として衆議をはかり、町の発展を見つめてきました。この附近は、小学校、郵便局、登記所、交番、銀行など当時の町を中心地域でもありました。この頃、明智町は製糸工場が20数社にもおよぶ生糸の町で、しかも最高級品が生産され、欧米にも盛んに輸出されていました。明智町は当時外貨獲得のスターでもあったわけです。役場前の道はその昔、明智城への登城道で代官所へも通じる道でもありました。昭和32年9月まで明智町役場として使用されていました。

### ●大正路地

かつては、中馬街道、南北街道の間をつなぐ道であり、大正時代のたたずまいを色濃く残す路地でもあります。素封家であり、初代町長、濃明銀行の創始者、故橋本幸八郎氏宅の年貢米を納めた米倉と、江戸時代から続いた旧家の呉服問屋の反物を入れた倉の並ぶ路地です。この黒い羽目板は、数個の棧をはずすと、すぐ一面の土壁となって防火壁の役目をはたし、窓を閉ざせば外からの火を完全に防ぐ仕組になっています。

### ●銀行蔵（大正村資料館）

明治30年当時の先覚者、橋本幸八郎氏が設

立した濃明銀行のもので、昭和17年、十六銀行に合併するまで蔵蔵として使用されていました。生産された繭を農家から買い取って収納する為に建てられた倉庫です。百畳敷4階建ての貴重な大正建築で当時その威容は、城下街での城に匹敵する、町のシンボリック存在でした。附近の山から切り出された材木が使われ、繭の品質が変わらないよう、厚い土蔵造りになっています。また銀行は、その繭を担保として融資を行い、生糸の町をつくりました。白壁の上の方に黒く描かれた紋章は濃明銀行のシンボルマークで、日と月を表わし明智町の明かるさをデザイン化したものです。



● 明智陣屋（代官所）

明智城は、宝治元年（1247）景重の代に創設されたと伝えられ、以来遠山氏累代の居城であった。元龜3年（1572）武田勢に攻略され、天正10年（1582）家康に従った利景がこれを奪還したが、天下を取った秀吉麾下の森左近が入城。関ヶ原の役後、慶長5年（1600）利景は遂にこの城を回復、同8年、本領明智を賜わるの朱印状を得た。元和元年（1615）旗本二代領主方景に江戸屋敷が与えられ、明智城は廃城となり代りに城の大手門近くに陣屋がおかれる事になった。これが大手門跡である。旗本遠山氏の代官陣屋として、家老村上氏が藩の行政、租税、裁判を行った所で、江戸時代から明治の大政奉還まで藩政が行われた。遠山氏の領地は、6531石6斗で、旗本5千騎の内、6千石以上の知行は50指に満たない。

● 龍護寺（遠山家菩提寺、臨濟宗妙心寺派）

大永元年（1521）、ここ塔仙坊りょうせんに楞嚴院があり、柏庭和上が住んでいた。この人は京都、妙心寺にいたが、三河旭村の三丈寺を経て当地に落ち着いたと云われている。慶長元年（1596）明智城主、遠山利景は城の北に浮地を選んで禅刹一字を建立、そして嚴院を改め龍護寺とした。この時和尚椽室がいわゆる中興の開山である。建立の直後、覚岩和尚が法嗣をついで第一世となった。この時以来龍護寺は、代々遠山氏の菩提寺となった。寺の本堂横に遠山氏累代の墓がある。また山門入口右手に光秀公の供養塔と伝えられる碑が建っているが光秀公に関する碑はその「悲痛な想い」でことごとく割れるといった通説の通り、斜めに大きくひび割れが入っている。またこの寺には九条衣の伝承がある。これはその昔、或る夜落武者が訪れ、無念の主君光秀公の直垂を持参し、永代供養を乞うて去った。それ以来九条衣と称ばれる袈裟の四隅にこの光秀公の直垂の布が縫い込まれ、寺宝として伝えられている。この九条衣は毎年光秀公の命日、6月14日にその供養を兼ねて一般に展覧される。（但し、有料であるそうです）

● 金幣社、八王寺神社（県重要文化財）

この社は、天照大神の八人の王子（王女3人、王子5人）を祀り、平安時代の天曆3年（949）に創建された。千年を超える歴史をもつ郷土の産土神（うぶすなかみ）、古事記によれば、天照大神の胞衣を納めた山、胞衣山が、恵那の地名の始まりとされている。わが国神道の大本ともいえるこの地方にふさわしい社格をもっている。

遠山氏12代、景行の頃、甲州から出て天下制覇を夢見る武田勢の兵火にかかり城と共に焼失した。その後、領主遠山氏の産土神として、度々造営が繰り返された。現在の社殿は、延宝4年（1676）時の領主遠山半九郎伊次による造営である。

## ◇ 投 稿 欄 ◇

### 盛田命祺翁銅像記より

高松久春

小鈴谷白山社の一隅に竝立する盛田命祺翁の胸像は、曾つては等身大の立像であったという。銅版に刻まれた碑文によってその偉容を偲んでみたい。

冒頭、“広額豊眉、大耳隆準、髯髯毳毳然として軀幹堅勁、巖上の松の如し”とあるによって、その風貌はまさに“巖上の松”の如く、巖然たるものがあったことをうかがわせる。“隆準”とは高い鼻のことであり、“髯髯毳毳然”というのは、口ひげとほほひげが長々とのびていたというのである。

翁は、名を命祺、字は爪寿、南畝と号し、久左衛門は通称である。盛田家は<sup>えき</sup>奔世の素封家で、慶長年間の検地帳によると、当時既に“田禄三十余石”あったという。元禄に至って醸酒を営み、翁は第十一世の主であった。天保年間の饑饉には、まだ弱冠でありながら家兄と力を協せて密かに金穀を施し、貧しい人々を救済したという。また醸酒の法を改善し、<sup>ししゅう</sup>豉醬（みそ・たまり、醬油）を製造し“販売頗る盛んなり”とある。

更に、“或は荒蕪を開墾し、或は山阻を修築し、<sup>かいせい</sup>海滋以て交通の捷達を図る”とあるは、進取の気性に富んだ翁の面目を如実に示すものである。また、教育を奨励し、社祠を造営し、<sup>だんおつ</sup>檀越心月斎を修繕するなど、“美事良績、僕を更ふるも数へ難し”とある。伊勢の国より溝口幹先生を招聘して、“鈴溪義塾”を開校し、白山社の本殿を改築して今日の姿あらしめたのも翁の遺業で、まことにその功績は数多くして数え切れないものがある。ために、尾張藩侯、愛知県庁、賞勲局等よりたび重なる褒賞を受けて

いる。

“翁天資誠懇、事理に明晰にして、其の断行する所は輒ち能く効を奏す”と。また、“鐘鼎書画を愛し、頗る鑒識有り、名紳高僧の来たりて訂交する者少なからず”とあるごとく、事業家としてはもとより、文化人としての鑑識・識見また卓越するものがあつた。

翁は、文化13年9月21日生まれ、明治27年4月4日、享寿79才にして病歿、盛田家中興の祖として燦たる栄光を放っている。

### 常滑市内の道標

桑山亀義

○道端の文化遺産

車の行きかう国道などから、昔からの細い街道へ一歩入ると、思わぬところに古い道標（みちしるべ）を見つけることがある。道標の多くは、雑草の中に埋れていたり、建物のかげにかくれていたりして、気付く人もなくひっそりと立っている。中には折れて、打ち捨てられているものさえある。その昔、旅人はこれらの道標をたよりに、旅をつづけたものだろう。

車社会の今日、昔の街道はその姿を全く失ない、大切な文化遺産であるこれらの道標も、一つまたひとつと失われていこうとしている。先人の残したこれらの遺産を、昔の道をたどっていくうちに、いくつかまだ残されていることが判り、60近くの道標の所在が確認できた。道標といっても新四国札所への順路を案内したものがほとんどである。昔からの場所にある道標はほとんどなく、道路改良土地基盤工事などで多くは別の所に移動しているし、立てる場所もないか寺の境内に放置されているものもある。

○刻まれている行き先

1) ○○丁 南無大師

○○丁 ○○番へ

新四国〇〇番

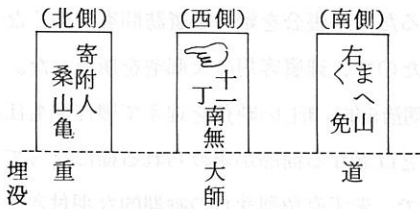
- 2) 「右まへ山道・くめ道」「右さく道」「右とこなめ道」「左大の道」「右のま道」
- 3) 「多賀神社へ三丁」「天神社マデー丁」「左佐治古跡碑道」
- 4) 道路元標

○いつ立てられたものか

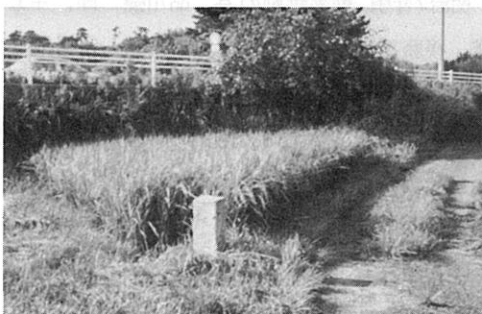
大体に寄附人の名前が刻まれている。その名前からは現代より2代前の名前が多い、建立した年月があるものは数基であった。「昭和9年」「明治43年」「明治42年」「明治38年」

○紹介

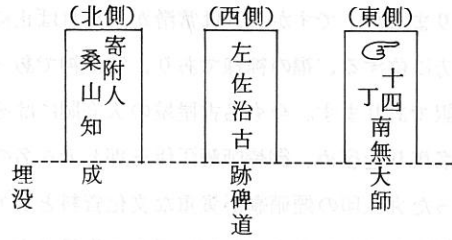
- 1) 金山字東長峰地内 (旧ほうろく山)  
耕地基盤整備の畑の中にあり  
旧県道岡常線 (宮山地内)



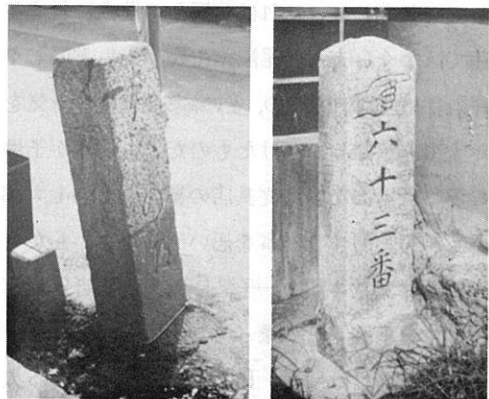
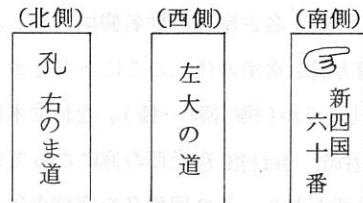
- 2) 金山字上白田地内 (常北高校の北方)  
旧県道岡常線 (宮山地内)



耕地基盤整備がおこなわれ現在の岡常線道路 (南側) にあり



- 3) 苅屋町一丁目地内 (県道から多賀神社参道への三叉路一かどや店前) にあり



続毘沙門天の如く

鯉江俊三

私は前に同じ表題で一文を投稿しましたが、御承知の様に毘沙門様は金運をお授け下さるお方と云われて、七福神の一人に数えられております。又もう一つの名を多聞天と称して、帝釋天の外臣として北方を守る御方と仰がれてゐます。昔、常滑は尾張の殿様を毘沙門様の如く、或は多聞天様と仰いでいた時代があります。即ち、常滑からすれば北に位する、名古屋城の殿様より

御風炉師を仰せつかったり、御焼物師を仰せつかって、御引立てを蒙り、多分の金子を頂戴しておりました。ですから之は常滑から見れば正に北方に位する、福の神様であり、守護神であった訳であります。今も名古屋城の天守閣にはその名残りを留め、御焼師鯉江伊三郎と云う名の入った丸八印の煙硝壺が貴重な文化資料として展覧されております。或は又、方寿の作品の中に尾陽南伊三郎と云う北を意識した銘のものもあります。なお井上房太郎先生は楊南と号しておりましたが、名古屋城は別名柳城と称し、即ちその南方遙か常滑の住人ここにありと云う所でありましょうか(楊は柳の一種)。なお世木村の青年会は往時、今は村田彦光邸の庭になっている場所に会所があり、その団体名を南強青年会と称しておりました。これはお隣りの北条に対する南ではなく、方寿の尾陽南や楊南先生と同じく、尾張名古屋は城でもつの、そのお城南健児の意気を示す事を意識してつけたものだ、私達が子供の頃お世話になった文具店の御主人石井七太郎さんからお聞きした事を思い出します。しかもその石井又左エ門の一子又七さんは、御自分の店の屋号を南強堂と名乗っておられました。さてその後御時世は変わり、毘沙門様の由来を知る人も少くなり、御利益の程も亦複雑になって参りましたが、ここに又の名、多聞と云う字句があり、何とも耳寄りの文字でありますので、私は或る時、郷土の地名を織り込んで一首纏めて見た事があります。お粗末で誠に済みませんが、御紹介申し上げます。「愛と知の多くを聞きて常滑の絶ゆる事なき須恵を開かむ」と云うものであります。これが私の叶わぬ迄もの願望であり、この愛と知の多聞様即ち現代版毘沙門天をこそ落ち込み勝ちの我が郷土常滑の守護神にと斯くの如き次第であります。冷汗の巻終り。

## 元常滑美術研究所の建物遺構 (元鯉江家旧宅)に就いて

村田正雄

この建物は現在の半田市世界メ醸造業竹内佐多夫様家旧邸の事ではありますが、実はこの建物は江戸時代からの常滑焼発展の歴史文化を知る上で、唯一貴重な建物遺構文化財であると思います。今この貴重な建物が竹内家様の格別な御理解と御好意により常滑市へお譲り頂けるお話がありますので、この旧邸の由緒に就いてその概略を年表に基づき御説明申し上げたいと思います。

文化12年。初代鯉江小三郎尚方により真焼登り窯が開発された。以後、かめ類の優良な生活用陶器の大量生産が可能になり、その上尾張藩御用窯の定札を許され、煙硝壺を始め高須候江戸屋敷に真焼土管を納入する等、御焼物師として尚方、方救、方壽、鯉江家三代の尽力で窯業の拡大経営に成功し多額の財を築いた。(鯉江家資料より)

弘化3年。鯉江方壽は御用窯御焼物師の身分であるため尾張公を始め来賓訪問客が多くなってきたので、迎賓客用の大邸宅を新築した。

明治5年。新しい時代を迎えて製作品も江戸時代とは異なる商品が求められる様になってきたので、先ず直角型受口の画期的な羽付き土管を発明し、鉄道用、下水道用、上水道用等各種の土管を大量に納入出来る事に成功して行った。

明治7年頃。勸業奨励の為、品川彌二郎、井上馨、後藤新平などの政府要人が来訪し常滑陶器を勸業博覧会出品の事等の依頼を受ける。

明治9年。書画印刀彫刻の大家加納鉄哉を招聘し朱泥急須加飾の法を壽門に伝授。(鯉江家資料より)

明治11年。中国の文人金士恆を迎え本場のパンパン製法を壽門、方壽、四代長三などに伝授。



明治14年頃。備前の人で横浜の真葛香山の高弟梶原芳三郎号名天録堂を備入れ、エンゴペイによる薩摩焼風金蘭手作品を研究して貿易事業を計画した。(鯉江家資料より)

明治16年。工部省大技師宇都宮三郎氏来たり美術研究所設立の必要を説き、且つ窯を従来如く斜面に築きしを改め平地に築き煙突の斟酌によりて自由に焼き得る平地窯の法を、鯉江方壽、清水守衛等に授け陶窯の改良を計れり。中略。同年8月内藤陽三、寺内信一の両氏を聘し美術研究所を設け、児童を集め図画学動植物の粘土彫刻及び石膏模型等の法を学べり。中略。爾來精巧綿密の品を容易に製作し得るに至れり。是れ全く内藤・寺内両氏の賜物にして其の功も亦大なりというべし。(常滑町青年会常滑陶器誌より)

明治20年。武豊に陸海軍の大演習があり、明治天皇野立所及び鳳翔閣建築の儀となり、美術研究所に於ては鳳翔閣玄関用敷板、手焙り火鉢、雲竜模様大水鉢(一齊作)、大火鉢数個、朱泥・白泥手焙り炉、数十頭の鹿の庭園置物などを寺内が謹製して献上した。後日12頭の鹿置物は宮中から上納の通達があり納入を完了した。(寺内信一著尾張瀬戸常滑陶器誌より)

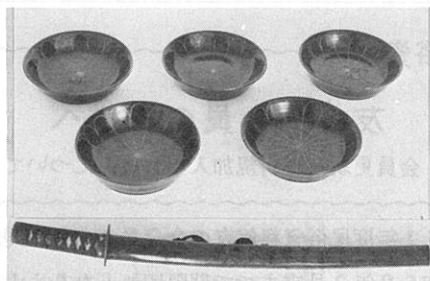
明治21年末。常滑美術研究所は、鯉江家の財力が窮乏して来た為廃止されたが、研究所の製陶技法伝授の仕事は、その後各工場や陶器作家たち及び学校教育などにより受け継がれ、多角的な産業の発展となって大きな成果を挙げた。

明治25年。美術研究所が設けられていた鯉江家の大邸宅は、事業の借財が重なり、その為に古場の沢田儀左門氏に買い取られ、成岩町の竹内佐次門様家へ移築された。それが現在の竹内佐多夫様旧邸であります。(鯉江家資料より)

## 民俗資料館展示案内

郷土の歴史を掘りおこすシリーズ(その1)

☆わが家の歴史展 好評開催中 ~3/31日  
“ 広目富松家に伝わる謎の歴史 ”



富松家14代当主、与作氏の長年にわたる調査研究と友の会の資料調査によって、当家に伝わる謎の歴史を紹介。

### 講演会

「二代將軍秀忠の弟松平忠吉と

富松家の関係」

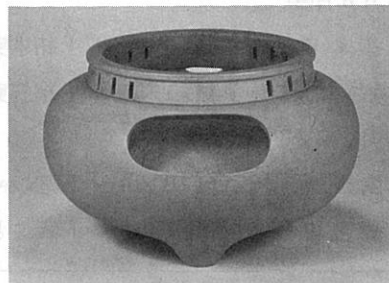
講師 片山忠義氏

日時 3月15日(日) PM1:00~

場所 民俗資料館2階講座室

尾州徳川家御風炉師

☆赤井陶然展 4/3~5/31日



初代陶然は、通称新六と言ひ宝暦12年生まれ、初め総心寺清州和尚の指導を受けて風炉を作り、尾州徳川家の御風炉師となる。風流人にして常に茶事を嗜み茶器にも会心の作が多い。

## 講演会

「赤井陶然について」

講師 山田陶山氏

日時 4月12日(日) PM 1:30～

場所 民俗資料館2階講座室

## 民俗資料館

### 友の会会員の皆様へ

会員更新及び新規加入申し込みについて

61年度民俗資料館友の会会員の有効期間が、昭和62年3月末までで期限切れとなりますので、会員更新の手続きをして頂きますようご案内致します。又、お知り合いの方々にも広くご勧誘下さるよう合わせてお願い申し上げます。

○更新(新規加入)受付

昭和62年3月10日より

○受付場所

常滑市民俗資料館

○持参するもの

年会費 1,000円

更新の際には旧会員証

### <3月のご案内>

部会(資料館講座室・会議室)

3月8日(日)

拓本部会 AM10:00～「拓本実習」

古文書部会 PM 1:30～「解説実習」

3月22日(日)

陶芸美術部会 AM10:00～「縄文から弥生」

郷土史部会 PM 1:30～「伝説と信仰」

### 投稿される方へ

論旨を損なわない範囲で補筆する場合があります。原稿は返却いたしません。ご了承下さい。

## 表紙紹介

紙本淡彩慧可断臂図

雪舟筆 一幅

大野 齊年 寺

縦1838㎜ 横1128㎜

(国指定重要文化財)

この絵は享禄5年(1532)、知多郡大野城(宮山之城)主佐治上野守為貞が、父駿河守宗貞の菩提を弔うために創建した齊年寺に施入したもので、『四明天童第一座雪舟行年七十七歳謹図之』の款記と鼎形朱文「雪舟」及び方形朱文「等揚」の二印が押され雪舟の代表作として高く評価されている。インドから中国に渡った達磨が洛陽に近い嵩山の岩窟で、面壁九年の座禅を組んでいた時、神光という僧が熱心に教えを乞い、大雪に埋れながら一夜達磨の背後に立ちつくした。達磨はその志の並々ならぬことを感じ、初めて口を開き、神光はその聲に応じて、自ら切断した左手を達磨に差出した。かくして神光は達磨の法嗣となり、慧可の名を与えられて、禅宗第二祖となる。この光景を描いたのが本図で、力強い墨線によって岩窟が描写され、その静寂そのものの厳しい環境の中での二人の激しい精神の交流がみごとに表現されている。

尚、この慧可断臂図には、同じ佐治上野守為貞の寄附になる青磁の香炉が添えられている。これは宋代の作品で、牡丹の浮彫りがある処から、浮牡丹の香炉と呼ばれている。

(昭37・8・29国指定)

### \*おわび訂正

創刊号 4頁 郷土史部会の中で、木下仁左衛門とありますのは、木下仁右衛門の誤りでした。

昭和62年3月2日 発行

発行 常滑市民俗資料館友の会

常滑市瀬木町4丁目203番地

TEL<05693>4-5290(有線)54-429